

三島の教育 授業アイデア 成果集



三島町保・小・中きずなプラン 学びの部会
三島町教育委員会

目 次

○ はじめに

(小学校編)

- 1 「ゆさぶり」により話し合いを深め、表現の工夫に気付く授業（国語）
- 2 キーワード等による話し合いの焦点化で、読みを深める授業（国語）
- 3 目的意識の明確な課題設定で「共有」と「吟味」を深める授業（国語）
- 4 少人数のよさを生かした表現活動の場の工夫（国語・総合）
- 5 学びを深める体験活動を通した主体的な学び（総合）

(中学校編)

- 6 実感の伴った理解にたどり着いた授業（理科）
- 7 視野を広げ関連する世界が広がった授業（保健体育）
- 8 見通しを持たせたことで考えが始まった授業（数学）
- 9 日本語を介さずに英語を理解する授業（英語）
- 10 ディベートによる能動的な授業（社会）
- 11 深い理解にたどり着いた授業（国語）
- 12 正解のわからない課題の最善解を考えた道德の授業（道德）
- 13 表現力の一層の向上を図る合同表現活動（国語）
- 14 学びを深め、知識の理解の質の向上を図る活動（探究）（総合）

○ 編集を終えて

はじめに

平成から令和に変わり、新しい時代を迎えました。ラグビーのワールドカップでの日本代表（ブレイブ ブロッサムズ）の活躍に盛り上がり、2020東京オリンピックが近づきわくわく感も高まっています。そんな中、小・中学校は新学習指導要領への移行期となり、新たな変革の時期を迎えています。特に、小学校では、令和2年度の新学習指導要領完全実施に向けての慌ただししい準備の年でもありました。

新学習指導要領でまず注目しなければならないのは、「社会に開かれた教育課程」・「主体的・対話的で深い学び」・「特別の教科 道徳」・「プログラミング教育」などの新しい言葉です。これらは、子どもたちが生きていく現代社会の課題や未来への期待などが反映されているものと考えます。急速な社会の変化に予測が困難な時代、また、急激な少子高齢化が進む中、子どもたちは、一人一人が自らの生き方を選択したり、新たな価値を創造したりすることが求められるようになります。このような時代にあって、学校は、子どもたちの「新しい社会の中で他者と協働して主体的に『生きる力』」を育成することが求められています。

そのため、学びの部会では、「主体的・対話的で深い学び」に焦点を当てた授業作りに取り組みました。少人数の強みを生かして、また、少人数の弱みを克服する工夫を行って、一人一人の子どもたちの確かな学びの創造に努めてきました。

本誌は、本年度の取り組みをまとめたものです。改めて一つ一つの足跡を振り返ることで、今後の教育活動のさらなる発展に結ぶつくことを期待いたします。

令和2年 3月

「三島町保・小・中きずなプラン」推進委員長

三島町立三島小学校長 藤田 雅也

小 学 校 編



「虫供養」 11月（早戸地区）

農作物を守るために、
追い払われたり、駆除されたりした虫などを供養する行事。

早戸地区で毎年行われている行事に、3・4年生は、「総合的な学習の時間」に地域を知る活動として参加している。

「ゆさぶり」により話し合いを深め、表現の工夫に気付く授業



6月14日（金）5校時 2年 国語 五十嵐みのり 先生
「会津教育事務所要請訪問授業」 ご指導：会津教育事務所指導主事 古川 潔 様

「2つの文章のちがいは？それぞれのよいところを見つけよう！」

ふろしきについて書かれた長短二つの文・文章を読み比べ、それぞれの表現方法のよさについて、話し合う授業でした。子ども達は、共通点や相違点を見つけ、それぞれの文や文章の「どんなときに」「どんな場所で」などの教師の揺さぶりを受けながら、話し合いを深め、「相手意識」「目的意識」「場面意識」などに応じた表現方法の工夫に気付いていきました。「読み取り」学習を終えた後、自分たちの経験も踏まえて学習内容を振り返ることで文や文章のイメージをさらに広げ、また、気付きや考えを共有し合うことで言葉への関心を高め、「深い学び」へと導く授業でした。

キーワード等による話し合いの焦点化で、読みを深める授業



10月9日(水) 5校時 4年 国語 星 和雄 先生

「小規模市町村指導主事訪問」 ご指導：会津教育事務所指導主事 高橋 光政 様

「ごんは、どうして いたづらをしたくなったのかな？」

「いたづら」という言葉をもとに、主人公である「ごんぎつね」の心情や物語の背景にある「さびしさ」について考えを深める授業でした。子ども達は、キーワードやキーセンテンスに線を引いて、自分の考えをノートに書き表し、それをもとに話し合いを進めました。教師は、子ども達の発言を価値付けするとともに話し合いの焦点化を図り、「ゆさぶり」や「認め励まし」を行いながら、話し合いを深めました。

目的意識の明確な課題設定で「共有」と「吟味」を深める授業



9月26日(木) 5校時 6年 国語 菅家 浩子 先生

「小規模市町村指導主事訪問」 ご指導：会津教育事務所指導主事 高橋 光政 様

「なぜ、筆者は これらの資料を 用いるのだろうか？」

「町の幸福論」の読みの学習において、「三島町の未来について考え、プレゼンテーションをする」という課題意識を持たせることで、学習意欲を単元を通して持続することができました。本時は、文章の中に差し込まれている資料の役割について、その効果について明らかにすることで、表現の工夫を自己の表現に生かすという授業でした。写真・グラフ・図といったそれぞれの資料の役割について、個→グループ→一斉と学習形態を変えながら話し合い、「共有」と「吟味」を深めることができました。

少人数のよさを生かした表現活動の場の工夫



1 全校給食の時間を活用した発表の場

ランチルームでの全校給食の場を活用し、国語で学習した内容の発表を行いました。
<1年生 「じゃんけん屋さん」の発表と感想を述べる他学年児童>



2 町文化祭への参加

<4年「昔語り」の発表>

総合的な学習の時間に、地域の語り部から学んだ昔語りを発表し、好評を得ました。

1年生は、自分で考えたじゃんけんを説明し、全校生で楽しむことができました。他の学年のランチルームの時間をうまく活用し、発表の目的意識を高めることができます。



学びを深める、体験活動を通じた主体的な学び



○ 地域の素材や人材を生かし、学びの質を高めるための工夫 ○

1 地域素材の開発・人材の活用

三島小学校では、総合的な学習の時間に、「郷土」「命」「交流」の3つを柱として、探究活動に取り組んでいます。大きなテーマは、「大好き、三島町 三島町の宝物を探そう」です。三島町の地域探検や体験活動を手がかりに、三島町のよさへの理解を深めています。また、「三島小まつり」などを通して、積極的に発信する活動に取り組んでいます。

<「三島町特産の桐の栽培活動」>

桐の芽かきや植樹などを、アドバイザーの指導の下で体験し、栽培の工夫や努力に気付くことができました。



<桐材・ヤマブドウの蔓を使って生活に役立つ物を作ろう>

生活工芸館で、アドバイザーの協力を得て、桐材やヤマブドウの蔓を使った工作を体験しました。桐が生活にどのように役立っているかを、様々な製品に加工されていることから理解を深めました。また、作成した桐製品を生活に生かすことで、軽くて加工しやすい桐のよさを実感することができました。ヤマブドウの蔓を使った製品は、大変手間がかかって高価であることも学びました。

6年生は、卒業証書を入れる筒を、桐材で作成し、卒業制作としました。



この他、稲作体験や収穫した米を使った「おばあちゃんの味」での郷土料理の調理体験、保育所や特別老人ホームでの交流体験、寄席文字や写真撮影など特技を持った方からのご指導など、様々な体験活動を通して、生きた学びを実感しながら、ふるさと三島町のよさへの理解を深めました。

2 表現活動と情報発信

「総合的な学習の時間」での体験活動を通じた学びを、グループごとに「三島小まつり」で発表しました。発表原稿とパワーポイントの資料を作成し、保護者や地域の皆さんの前で発表することで、表現の工夫や情報発信の仕方を学びました。



普段、少人数学級で過ごしている子どもたちにとって、保護者や地域の方々多数の前で発表する体験は、大きな緊張を伴うものですが、自分たちの言葉で、思いや考えを伝える体験は、大きな自信につながっています。また、発表原稿の作成や発表資料の画像を選択する場面では、グループでの対話が生まれ、自分たちの体験を価値付ける深い学びへとつながりました。

今後は、さらに情報発信の仕方を工夫できるように、資料の作成や表現方法の広がりについて指導していきたいと考えます。

中 学 校 編



「虫送り」 6月～7月（県指定重要無形民俗文化財）

農作物に害のある虫を追い払うために行われる行事

地元の中学生が中心となり準備、運営されており、代々受け継がれている。

実感の伴った理解にたどり着いた授業



10月8日(火) 5校時 3年 理科 猪俣和弘 先生
「理科授業力アップ研修会」福島県教育庁義務教育課 授業公開
会津地方の理科の先生方を中心に30名が参観

「親方から、12kg上げてくれと言われたら、滑車をどう組み合わせるのがいいのでしょうか？」

動滑車と定滑車とを組み合わせ、120Nの物体を、より小さな力で引き上げる方法を考えるという課題で、まず、3～4人の班で知恵を出し合い方法を考え、次に代表だけを残し他班の情報収集に、代表は他班から来た人に自班の考えを説明する、そして、他班から戻った仲間と共に最終的な方法を決定するという方法をとりました。

最後は、頭の中で考案した方法を、実際に組んでみて、理論通りにできるかを確認してみました。

そしてついには、 $1/6$ の力、2Lのペットボトルの水1本で引き上げることに成功を体感しました。正に実感を伴った理解に至る授業でした。

子どもたちから沸き起こる「おーっ！」とか「わあーっ！」という歓声、そして何よりも、みんなで協力して楽しそうに取り組む表情が印象的でした。

視野を広げ関連する世界が広がった授業



10月30日（水）5校時 3年 保健体育 佐藤雅司 先生

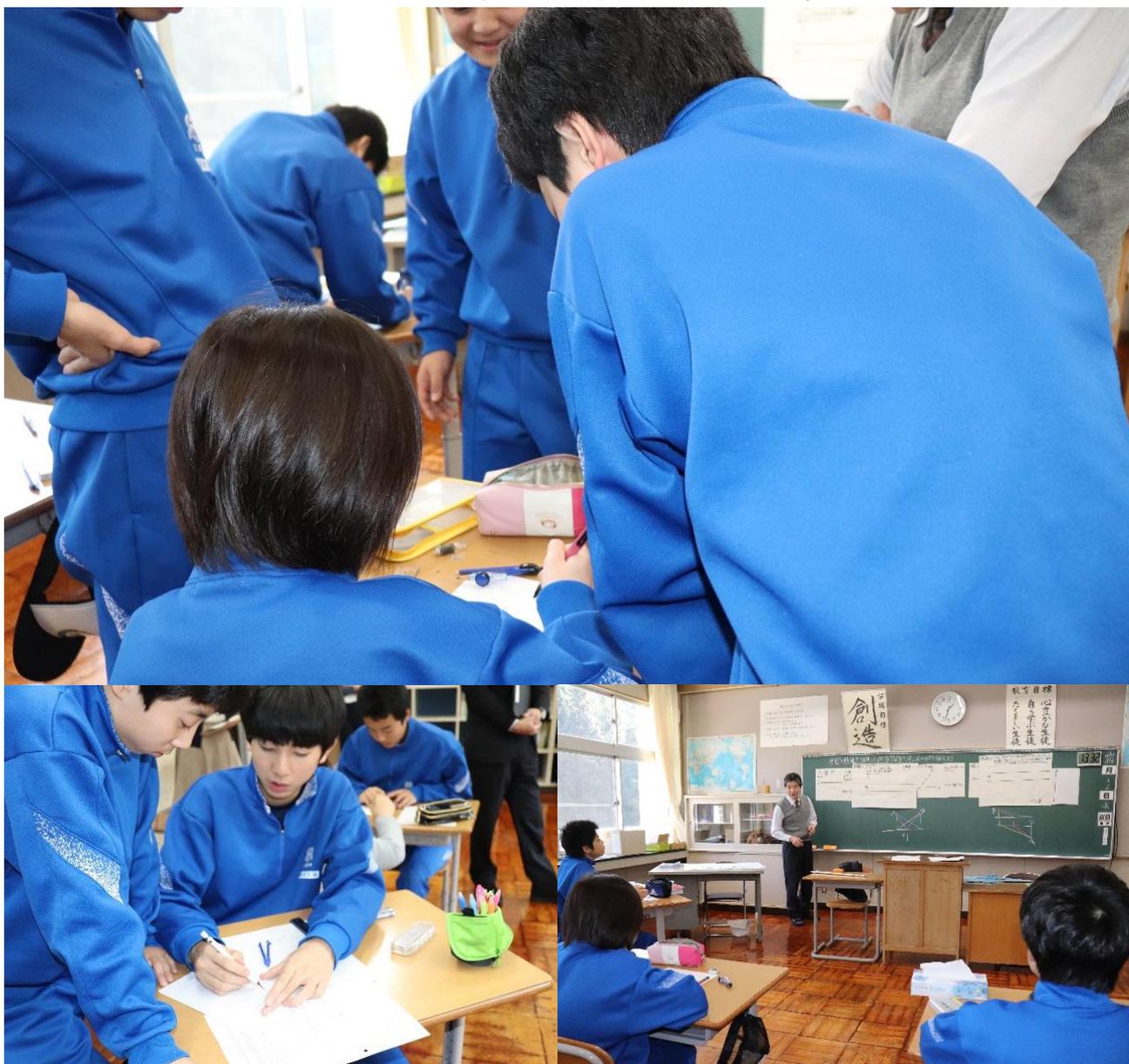
「国際的なスポーツ大会は、どのような役割を果たしているのでしょうか？」

「国際的なスポーツ大会」という言葉のイメージに、自分が選手としての目線で考えていた子どもたちでしたが、映像を見た瞬間から、観客としての目線、メディアを通して感じる目線が加わり、広い視野で考えることができるようになりました。

まず、それぞれが感じたことを付箋に書いて持ち寄り、次にその内容について班でキーワードとしてまとめ、最後は全体でキーワードをもとに課題に対する答えをまとめていく活動をし、その1つ1つが効果的に行われた授業でした。

子どもたちのつぶやきや発言される言葉から、これまでのいろいろな教科での学習との関連が伺え、深い学び、理解への状況が見える授業でした。

見通しを持たせたことで考えが始まった授業



11月13日(水) 5校時 1年 数学 小原博明 先生

「川のどこで水をくめば歩く距離が一番短いでしょうか？」

本時の最初に、最終的に解決したい課題を提示された子どもたちは、「えっ！」とか「わかった！」とかすぐに反応して、話し出しました。頭の中では、もう考えが巡らされていて、自分の課題になりつつあります。難しいながらも、具体的な問題を前にすると、子どもは考えることを始めます。

そして、正しいかどうかは別として、自分のアイデアを友達、先生に伝えだし、同意を求めますが、そううまくいきません。しかし、こうした子どもたちから自然に出てくる言葉や声のやりとりで、自分の考えに自信をもったり、修正したりして、学びは深まっていきます。それは、教師側がルールを引いたペア→グループ→全体といった情報交換ではなく、伝えたい、確認したい、と子どもたち自身が目的をもって発するものだからだと思います。そういう授業では、子どもたちの生き生きした姿がみられます。

日本語を介さずに英語を理解する授業



11月15日(金) 3校時 1年 英語 古川裕梨 先生

「物のある場所を伝えるには、どの表現を使いますか？」

前置詞の日本語訳を示さず、写真の中の物の位置を表す言葉として英語で前置詞を示された子どもたちは、その意味を英語の世界で考え始めました。

日本語ありきの英語学習ではなく、英語の持つ意味、ニュアンスを、日本語を介せず理解させていく、平成、令和世代の英語学習がここにはありました。

「ピーラーって英語だったんだ。」「タイヤってタイヤなの。」「ただ1つって何て言うんですか？」子どもたちは、頭の中に浮かんだことや、疑問をどんどん口にしめます。それを聞くと、この子が今、何を考えているのか、どこで悩んでいるのかが見えます。

頭の中が、アクティブかどうかは、子どもたちから自然に発せられる言葉や表出される文字、絵、動きなどで知ることができます。

そういう言葉等が出るような授業を、いかに仕掛けていけるかが大切です。

ディベートによる能動的な授業



11月26日（火） 3校時 3年 社会 二瓶浩伸 先生

「Tさん一家の生活は豊かである!？」

Tさん一家の家計簿から、その生活ぶりが豊かと言えるか、豊かとは言えないかをそれぞれの立場に分かれてディベートを行いました。

子どもたちからは、自分たちの立場で論を立てるのに際し、「給食って1食いくらぐらいですか?」「娯楽費って何ですか?」など質問がでます。そして、電卓を使って支出項目それぞれの妥当性を考え、判断します。

この時点で、子どもたちの頭の中はアクティブな状態であり、主体的に意見をまとめ議論に備えます。

このような点からも、正解のない論題に関してディベートを行うことは、能動的な学習といえ、思考・判断・定着に効果的な学習形態であると言えます。

深い理解にたどり着いた授業



11月27日(水) 3校時 2年 国語 阿部 悟 先生

「メロスの試練はこの順番でなければならないか？」

「走れメロス」(太宰治)のシラクスへ向かうメロスに降りかかる試練の順番を入れ替えたなら?という課題に対し、子どもたちは、①濁流、②山賊、③自分自身の3つの試練に、「身体的な試練」「身体的+精神的な試練」「精神的な試練」と意味づけをしました。

そしてさらに、「予選」「準決」「決勝」と、自分たちが経験しているバレーボールの大会に例え、3つの試練に重みづけをして、オリジナルの順番のすばらしさを実感しました。

終始、文字情報にこだわった国語の授業でしたが、自分たちの経験と関連付ける理解の深さまでたどり着くことができた授業と言えます。

正解のわからない課題の最善解を考えた道德の授業



11月20日（水）1校時 3年生 道德 五十嵐真由美 教頭先生

「人はなぜ人を好きになるのでしょうか？」

教頭先生から発せられた、正解のわからない課題に、3年生一人一人が、照れながらも自分の人生観をぶつけ、互いの思いを尊重しながら、誰もが腑に落ちるこたえを探していました。

子どもたち一人一人の、はにかみながらも自分の意見を伝えようとする明るい表情が印象的な授業でした。

表現力の一層の向上を図る合同表現活動



○ 小規模校、少人数学級ゆえの表現力育成の工夫 ○

1 状況

① どの学年も少人数であり、発表しても聞き手が少ない。

② より緊張感をもたせて、表現する経験をさせたい。

③ 全学年とも同じ教科担任が授業をしている。そのため、事前に要望すれば時間割を調整し、合同の授業を計画することが可能な機動力が三島中にはある。

2 工夫とねらい

- (1) 相手意識をもち、緊張を伴う相手に対して言語活動を行うことにより、表現力の一層の向上をねらう。
- (2) 表現への評価活動をとおして、より良い表現について定義づけをし、自己の表現を反省、改善する機会とする。

3 活動の概要

- (1) 「好きなものを紹介しよう」

④ 1年生 ⑤ 2年生 (1年 国語)

1年生の発表について、2年生が聴衆・審査員となる。



(2) 「生物が記録する科学」

② 2年生 ③ 3年生 (2年 国語)

2年生が教科書本文の内容をまとめ直したものをもとに、3年生に対してプレゼンテーションする。

3年生は2年生が行ったプレゼンテーションの方法や内容、態度を評価する。



(3) 「今に生きる言葉」

② 2年生 ③ 3年生、1年生 (1年、2年 国語)

2年生が、1年生の時にに行った「今に生きる言葉」(故事成語)の学習を発展させてプレゼンテーションする。

1年生と3年生は、2年生の発表を評価するとともに故事成語についての理解を深める。



(4) 「少年の主張三島中大会」

② 3年生 ③ 2年生、1年生 (3年 国語)

「少年の主張」の校内予選として、3年生が意見発表をする。

1、2年生はこれを評価するとともに、より良い表現について、定義づけを行う。



4 主体的に活動させるための工夫



少年の主張 三島中大会



令和元年
7月9日(火) 6校時
三島中学校プレールーム

No.	演題	発表者	○/10
1	命の大切さ	○○ ○○	
2	共存できる社会とは	○○ ○○	
3	なぜ、無くならないのか	○○ ○○	
4	私の好きな田舎町	○○ ○○	
5	光と陰	○○ ○○	
6	地球へのいじめ	○○ ○○	
7	高齢者と認知症	○○ ○○	
8	虐待と生きる権利	○○ ○○	
9	「知る」ということ	○○ ○○	
10	「いじめ」について。	○○ ○○	

(1)(4) 表現する内容が決まったら、別々の教室を練習場所として割り当て、各自が他者の目を気にせず練習できるようにする。そして、教科担任が巡回指導し、自分の伝えたいことが伝わる方法を考えさせる。

(2) 5人を2人と3人の2班に分けて役割をもたせ、相手の班に迷惑をかけないように責任をもたせる。

(3) 表現する内容とその方法について事前に十分指導助言を行い、自分たちで助言し合う力を育てる。

学びを深め、知識の理解の質の向上を図る活動（探究）



○ 学んで得た知識、その理解を深め、質を高めるための工夫 ○

1 第一段階 体験学習

三島中では、総合的な学習の時間（桐の里学習）において、全体テーマ「自分を知り社会を知り、将来を考えよう」、そして学年ごとのテーマに基づき、個人の課題を設定し追究する学習を行っています。その学習では、それぞれの課題解決に向け、地域に出て遠方に赴いて、さまざまな体験や情報を得る活動を通して追究します。

2 第二段階 表現発表

各自が課題を追究し、解決して得た知識、情報を持ち寄り、学年ごとのテーマで表現発表を行います。

発表の場は桐陽祭（校内文化祭）。町長さんをはじめ、地域の方々、保護者が来場する中、自分たちが学んだことをわかりやすく表現し、伝えます。

その方法は、演劇です。各学年30分の劇のシナリオを自分たちで作ります。シナリオの中には自分たちが調べ、体験し、学んだ知識が詰まっています。子どもたち一人一人の知識は、学年のテーマをいろいろな角度からカバーします。そして、初めて見た人でもわかるように、かみ砕いて、体全体で表現するため、みんなで話し合い、1つの劇を作り上げます。

その過程で、子どもたちの知識への理解は深まり、一層磨きがかかります。

3 活動の概要

(1) 1 学年 「郷土再発見学習」



三島町のよさを残し、さらに発展させる方策を考えるために、三島のよさを知り、三島を選んだ地域在住の方々を訪ね、話を聞き、学びました。さらに、観光で魅力を発信している近隣の地域に赴き、その特色を学びました。

それらをもとに、20年後の三島町の未来予想をシナリオにし、劇として表現発表しました。

第五幕

学校の教員、卓が生徒と話ししている。

卓：ん？どうした？ノートを見てほい？自主学習ノートはさっき見ましたよ！あれ、違うノートか。(へえ、これは着がいたのか？面白くないか、先生は子役役者こんな風に想像して書いたことがあるよ。同級生のみんなでね)

未希：こんな風になるんじゃないか、って・・・あつ

卓：ごめん、あさ、その話、また今度聞かせてくれよ、うん、さよなら。(生徒を見送って)どして売られていたんだろ、サンフランシスコ、ロンドン、すべては知っていたことだ、僕たちが書いた未来があったんだ、現実には僕たちが書いたとおり進んでいる、だが、何が書かれていたかすべてを思い出さなくてはならない、だから探さなければならぬ。あのノート、よげんの書を「暗転」

第六幕

卓：「S.E.J.」(佐藤)が「ブランド」を飲んでる。

未希：くそっ！なんなんだこの世界は、こんな閉塞してる、こんな世界なんて望んでなかった、たかさんの仲間が犠牲になった、誰のせい！

卓：あいつらだ、あいつらがあんな未来を想像したから、後悔するしかない、復讐だ！

未希：(電話がかかってきて、とる)はい、あ、はい、はい、はは、大丈夫ですよ、やりすぎたりしてなくて、俺を信じてくださいよ、佐藤さん。(暗転)

「カク」

(2) 2 学年 「職場体験学習」



「まず、バンパーのへこみとボンネットのへこみ、ライトのひび割れ、ああ、ライトの損傷本日もありませんね、これはちよっと直すにはお金がかかりますよ。これを機に新車を買ってみるなんてどうでしょうか。」

「うーん」

「ま、とりあえず見るだけ見てください。」

「えっ、いや、でも」

「はいそれでは香家さん、ご希望の車はありますか？」

「いや、特に」

「香家さんは三島町にお住まいでしたよね、三島だと雪道でも楽にぐいぐい進む、SUVなんかないですか？」

「確かに、SUV車なら私も安心ですね。」

「それではこちらの車でもよろしいですか？」

「ちよっと値段がね・・・」

「それならどうぞ安心下さい、当店は新車だけでなく、中古車も販売しております。」

「おお、本当ですか！」

「はい、では見に行かれますか？」

「はい、ぜひ！」

・暗転、パワーオン

スポット

2年生5人がそれぞれ、美容室、保育所、ペットショップ、病院、カーディーラーで職場体験をして、職業観を学び、自分のキャリアについて考えました。そこで学んだことをもとに、5つの職業の内容や働く上での喜び、苦勞が伝わるように、社会生活の1つのモデルをシナリオにし、劇として表現発表しました。

(3) 3 学年 「平和学習」



戦争2

主人公：「つ、こは？先ほどまでの町がない！・・・そうか、俺はこの時代に帰ってきたのか・・・」

主人公：「PP ぼろぼろの基地」

主人公：「こは、本当に日本からなんでことか、こまで押されているとは・・・」

主人公：「近くにあったラジオから玉音放送が流れる」

主人公：「どうか・・・戦争は終わったのか。これで俺は戦わなくてすむのか・・・」

主人公：「俺の音が聞こえる」

主人公：「みんなこの音！や」

主人公：「走ってステージ脇に消える」暗転

主人公：「明転(スポットライト)！ガマに入ってる」

主人公：「おい！誰かいないか！」

主人公：「みんな、死んじやった・・・私も国のために死ななきゃ・・・」

暗転

PP 集団自決とは

修学旅行で沖縄に赴き、「アブチラガマ」や「ひめゆり平和祈念資料館」を訪れました。そこで見て、体験したこと、現地の語り部に直接話を聞いて知った事実をもとに、戦争と平和について考えました。恒久の平和を願い、一人一人が世界的視野に立って考え、実行すべきことをシナリオにし、劇として迫真の演技で表現しました。

編集を終えて

少人数、それは、20人から30人程度の学級で授業をしている教師からすれば、子ども一人一人に目は行き届き、様々なことが思い通りにできそうな印象しかないかも知れません。

しかし、三島の先生方は、少人数がもっているものは「強み」だけでなく、「弱み」もあることを知っています。

少人数が生み出すことは、決して授業だけに留まらず、人間関係、子ども一人あたりの負担など、普段の生活の至る所に影響を及ぼします。

三島の子どもたちは、小学校に入学してから中学校を卒業するまで、ずっとこの環境で学校生活を送ることになります。そして、中学卒業後は多人数の環境に入っていきます。

この三島の子どもたちをよく知る先生方は、どのような工夫をすれば少人数であっても効果的な活動ができるのか、近い将来多人数の中に入っていく子どもたちに、どのような経験や指導が必要なのかも知っています。

しかし、規模の大きな学校から初めて三島のような小規模校に転入してくる先生には、そこにたどり着くまでに試行錯誤しかありません。

この時間は、子どもたちにとってもストレスとなり得ます。できれば、この期間は短いほうが良いわけです。

そこで、先生方がもっている、三島の子どもに合った指導の方法や工夫をまとめ、今後三島に転入してくる先生方に参考資料として残すことができれば、試行錯誤の時間、そして子どもたちがストレスに感じる時間が短縮できるものと考え、この成果集をまとめました。

三島の子どもたちの、高い学力の理由がたくさん詰まった成果集です。校種の壁を越え、教科の枠を外し、先生方のいろいろなアイデアを参考にしていただければ幸いです。

最後に、この成果集をまとめるにあたり、授業や資料を提供してくださいました多くの先生方に感謝申し上げます。

令和2年3月

三島町保・小・中きずなプラン「学びの部会」コーディネーター

三島町立三島中学校長 関根宏房

執筆者・編集協力者

代 表 佐藤 孝信 (三島町教育委員会教育長)

執 筆 者

委 員 長 藤田 雅也 (三島小学校長)

副委員長 関根 宏房 (三島中学校長)

編集協力者

松澤 勝浩 (三島小学校教頭)

五十嵐真由美 (三島中学校教頭)

五十嵐みのり (三島小学校)

星 和男 (三島小学校)

菅家 浩子 (三島小学校)

二瓶 浩伸 (三島中学校)

小原 博明 (三島中学校)

佐藤 雅司 (三島中学校)

阿部 悟 (三島中学校)

猪俣 和弘 (三島中学校)

古川 裕梨 (三島中学校)